

ノンバーバル・コミュニケーション行動としての ポーズの機能と役割への一考察

近藤 富英

キーワード：ポーズ，パラランゲージ，ヘジテーション，非言語コミュニケーション，
ターン・ティッキング

1. はじめに

ノンバーバル・コミュニケーション行動には声を使用するものと使用しないものがある。声を使用するものとしてはいわゆるパラランゲージ（類似言語記号）があり，声を使用しないものとしてはジェスチャー，顔の表情がある。パラランゲージはイントネーション，ストレス，発話速度など声に伴ってさまざまな意味やニュアンスを付加している。実際のコミュニケーション行動においては発話や文の途中でポーズ（pause＝間や沈黙）を置くことがしばしばあるが，これもパラランゲージのひとつと考えられている。当然ポーズは話し手が行うものであるが，それはどのような目的と役割を持っているのであろうか。またポーズが生じた際は，話し手，あるいは聞き手はどのような対応をするのであろうか。

本稿はインタビュー番組を基に，実際にポーズの箇所を探し出し，ポーズの生じた発話の前後や他の非言語行動などとの関係も見ながら，ポーズの役割と機能を明らかにしようとするものである。

2. ポーズとは

最初にポーズの定義を行っておく。本稿でいうポーズとは以下のようなパラランゲージ行動をいうものとする。

発話の中における時間的な間（ま）であり，発話の流れを瞬間的に断絶するものである。客観的な沈黙の秒数というよりは，コミュニケーションの流れの中でやや不自然に感じられる長さであればポーズとして扱う。

なお，英語などではポーズが嫌われるとよく言われるが，日本語では会話への参加者はポーズをより寛容に扱っているように思われる。

3. データ・ベースについて

3. 1. データについて

会話中におけるポーズを研究するには、実際の談話を観察することが望ましいが、本稿では近藤（2005）で用いたビデオ録画したテレビのインタビュー番組を使用することとした。近藤（2005）では「うなずき」の研究のために上記の番組をデータ・ベースとして使用したが、本稿では「ポーズ」の研究に使用することとした。このように同一のデータ・ベースを用いてさまざまな視点から分析研究が可能となっている。

データとして用いた上記のテレビ番組についてあらためて簡単に触れるが、これは、2004年9月29日放送のインタビュー番組『徹子の部屋』である。司会の黒柳徹子が毎回、ゲストをスタジオに招き、正味30分の対談をする番組であるが、この時はシンガーソングライターのタケカワユキヒデをゲストに招いた時のものであり、それをデータ・ベース化したものである。話題はゲストの長女の結婚式である。

3. 2. データ・ベース作成について

データ・ベース作成の手順は以下のとおりであった。談話分析のデータ・ベースとして適当と思われるゲストが登場する番組の回を選び、これをビデオ録画する。データ・ベースとして利用するには番組の進行に合わせた経過時間が示されている必要があるので、タイマーを付けて他のテープにダビングする。実際にはこのタイマーの付きのダビングテープをデータ・ベース作成に用いる。

次に音声のみをオーディオテープに録音し、そのオーディオテープを基にすべての会話をデータシートに書き起こした。その際、今回の研究のテーマであるポーズの箇所を探し出しチェックしておいた。あとでも説明するがデータシートとは言葉とポーズをはじめとしたパラランゲージ、さらには手や視線の動きなどのカイネシックス（動作）を同時に記入するために開発した用紙のことである。タイマー入りのビデオを見ながら、書き起こした文字に沿って「ポーズ」の場所をあらためて確認しそれを記録するという方法を取った。ポーズとその前後のカイネシックスが相互作用をしている可能性もあるので、視線や手の動きなどにも注目した。

3. 3. データシートについて

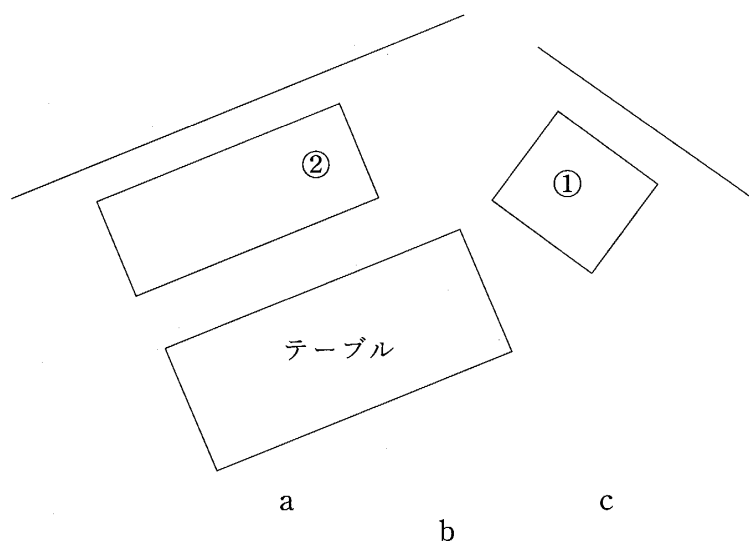
データシートはB4の用紙を横向きに使い、上下2段に分けてそれぞれ黒柳とタケカワの2人の記入部分がある。それぞれの記入部分は、さらに言語記号（L）とパラランゲージ（P）であるポーズを記入する部分、さらにジェスチャーなどのカイネシックス（K）を記入できるように分かれている。なお、一番上にはタイマーの示す実際の時間を示し、それぞれの発話とポーズが生じた時間や長さがわかるようにしてある。以上を示すと以下のようなものである。

T	分 秒	
	K P L	
	K P L	

データシートへの記入のしかたであるが、まずそれぞれの発話は漢字かな混じりの正書法を用いて、L（言語記号）の欄に記入した。ポーズの生じた場所にはPsという記号を使い、P（パラランゲージ）の欄に書き込んだ。さらに発話の前後で視線や腕の動きなど特徴的な動作があった場合はK（カイネシックス）の欄にその旨を記入した。このように書き表すことにより、二人のやりとりが重なっても同時に示すことができる。

3. 4. 参加者とスタジオのセット

インタビューの行われた場所はテレビ局のスタジオであり、壁を背にして椅子とソファが斜めに配置され、その前にはテーブルが置かれている。椅子には黒柳、ソファにはタケカワがそれぞれ座っている。以上を図示すると以下のようなになる。



①に黒柳が②にタケカワがそれぞれ座っている。カメラはa, b, cの3ヵ所にあるらしく、aが黒柳を、cがタケカワをそれぞれ捉え、bが全体像を映している。

4. 結 果

およそ30分の番組中にいくつかのポーズが観察されたが、ここではそれらを役割や機能に

従って分類してみたい。

ポーズにはまず大きく分けて二つの役割があることがわかった。ひとつは話し手のヘジテーション (hesitation) としての役割, もうひとつはターン・テイキング (話す順番) に関連したもので, 話し手が聞き手に対して確認や促しなどを行なうものである。前者は話し手が立ち止まって次に話す言葉や内容などを探しているときのポーズ, 後者は話し手が聞き手とインターアクションを行ないながら, 質問したり聞き手の反応を促していると言える。

4. 1. ヘジテーションとして使われるポーズ

ヘジテーションとして使われるポーズには以下の5種類が観察された。いずれもことばを探しているときのポーズとすることができるとは、単独で現れるケースは数は少なく、多くの場合は「単純ヘジテーション」(えー)「連体詞型ヘジテーション」(あのー)「副詞型ヘジテーション」(こー)など、他のヘジテーションと一緒に用いられることが多い。ここでは便宜上、以上のような名前をつけた。また、次に述べることばや内容を考えるポーズのほかに、既に述べたことばを言い換えたり、言い間違いを訂正したりするときにもポーズが使われる。以下ひとつひとつ例を見ていくことにする。

(a) 単純ヘジテーション「えー」と一緒に使用されるポーズ

例1:

T	分秒	0 23	25	28
黒柳	K P L		Ps	Ps
		この度も	えー	えーと
				そうなんですってね。
タケカワ	K P L		はあ	あ、婿殿が増えました。

「えー」のような直前の語尾母音に関係なく挿入されるヘジテーションを「単純ヘジテーション」と呼ぶことにする。タケカワは子供が多いことを黒柳は知っているが、この例ではタケカワの次女が結婚して家族が増えたことが話題になっている。黒柳は「この度も」と言ったあと、ヘジテーションの「えー」と「えーとー」を言いながらそのあとにポーズを入れている。子供が多くてだれが増えたのか一瞬ことばに詰まって、次のことばを考えているときにポーズが入っている。結果的にはタケカワが「あのう婿殿が増えました」と促されるかたちで応答した。このような「単純ヘジテーション」のすぐあとにポーズが置かれることがある。

(b) 連体詞型のヘジテーション「あのー」と一緒に使用されるポーズ

例 2 :

T	分秒	1 45	47
黒柳	K P L	Ps それであのーあれなんです。あのー息子さんが生まれたのが一番最初なんです	
タケカワ	K P L		

この例では、黒柳がタケカワの結婚した次女から長男の息子へ話題を変えようとしている場面である。黒柳は「あのー」と言いながら、ポーズを置いて次の内容を考えているのである。このように話題の転換時にヘジテーションのことばと共にポーズが使用されることがある。

(c) 副詞型のヘジテーション「こー」と一緒に使用されるポーズ

例 3 :

T	分秒	4 46
黒柳	K P L	
タケカワ	K P L	Ps 何っていうのかな その こー 何となく誰もがやるような そのコマーシャルリズムに乗った

この例では、タケカワが次女の結婚式をあげたいきさつを説明している。最初は地味婚のつもりが、タケカワ自身も皆でお祝いできるような式にしたがったということを説明し始めている場面である。自分の考えで進めた案でもあるので、ことばや内容を選びながら話している。「こー」と言ったあとポーズを置いて次に話す内容を考えている。このようにポーズは、ことばを選ぶというよりは、次に内容を考えているときにも使用されるのである。

(d) 既に述べたことを言い直したり、ことばを訂正するポーズ

例4：

T	分 秒	4 11
黒 柳	K P L	
タ ケ カ ワ	K P L	上を見ながら Ps Ps ふたりともえーと今年の4月から あ、 ^{はかせ} 博士課程 ^{はくし} 博士課程というのかな

上記の例では、タケカワは長女とその結婚相手がまだ学生で今年の4月から博士課程に進学することを説明している場面である。いったん「博士（はかせ）課程」と言ったあと、そのほうがいいと思ったのだから、ポーズを置いたあとで「博士（はくし）課程」と言い直している。このように自分の言ったことばを言い直したり、訂正したりするときにもポーズは使われるのである。

(e) 単独で使用されるポーズ

例5：

T	分 秒	12 8
黒 柳	K P L	Ps みんなもおんなじように やって行くのかなあ というふうに 思いますけどね
タ ケ カ ワ	K P L	

これはポーズがヘジテーションのことばと一緒に用いられるのではなく、単独で使用されている例である。黒柳は、今度結婚する次女だけでなく、下の娘たちも同じような素敵な結婚式をあげることになるのではないかとコメントしている場面である。「おんなじようにやって行くのかなあというふうに」と述べたあと、単独にポーズを置いて「思いますけどね」と続けている。これはあとに続くことばを探していると同時に、一息ついているような雰囲気使われた例である。

4. 2. 話し手が聞き手に確認したり、促したりする役割を持つポーズ

ポーズには今までに見たように話し手が次に話す内容を考えたりするための役割のほかに、

もうひとつ聞き手とのインタラクションを行うためのものがある。相手を促して「あいづち」を求めたり，ポーズによって質問の代用にしたり，さらには聞き手に発話を促すものである。これらはターン・テイキング（話す順番）に関係しているポーズと言えよう。

(a) 話し手が聞き手にフィードバックを求めるポーズ

例6：

T	分秒	0 46
黒柳	K P L	そうですね 一番最初の方は長女の方ですね
タケカワ	K P L	Ps 一男五女 ええ

この例では黒柳がタケカワ家の子供の数を聞いている場面だが，タケカワが「一男五女」と言ったあとで，黒柳の「あいづち」を求めている例である。このように日本語の会話は，一人が話し終わってから次の人が話し始めるというよりは，お互いにフィードバックを与えながら，協力して会話を進めていくといえる。ポーズはそのための役割も果たしていると言える。

(b) 話し手が聞き手に質問するためのポーズ

例7：

T	分秒	1 53
黒柳	K P L	右手を上げながら ノ Ps あの一息子さんが生まれたのが一番最初なんで長男
タケカワ	K P L	えー そうですね

この例では，黒柳がタケカワの子ども達のことを聞いているのだが，「息子さんが生まれたのが一番上，最初なんで長男」と上昇調で言ったあとにポーズを置いて，本当にそうなのか確認の質問をしている。このようにポーズを置くことによって質問ができるのである。このとき黒柳は相手に視点を合わせ，右手を軽く上げて，質問であるということをよりはっきりさせている。

(c) 文を終わらせターンをゆずるときのポーズ

例8：

T	分 秒	3 36
黒 柳	K P L	長い そんなにいられんの
タ ケ カ ワ	K P L	僕は大学にあのー 11年いたんですよ

この例ではタケカワは「僕は大学に11年もいたんですよ」と言ってポーズを取り、黒柳にターンをゆずろうとしている。「私の話はここまでなので次に話してください」というようなニュアンスである。このように自分からターンを離れて相手に話す順番をゆずるときにもポーズが使用されるのである。もちろん、ポーズを待たずに聞き手は話し始めることもできるわけだが、互いのインターアクションでポーズが生じる場合と言ってもよいだろう。とにかくポーズがあると聞き手は話し始める必要性を感じるのである。

5. まとめ

今回の分析でわかったことは、「ポーズ」には大きく分けて二つの役割と機能があるということである。ひとつは話し手が次に話すことばや内容を考えているときに生じるもので、ポーズが単独で使われる場合もあるが、多くは他のヘジテーションのことばと共に使用される。もうひとつは、より話し手と聞き手のインターアクションに関係したポーズで、話し手が聞き手にフィードバックや質問の答えを求める場合のポーズであった。

このようにポーズは、ことばが発せられない場合に使用されるので、イントネーションやストレスなどの他のパラランゲージとはその性質を異にし、一見すると会話の流れに不自然さを与えるように感じられるが、実際はコミュニケーションを円滑に行なう機能と役割を担っていると言えるのである。

今後の課題としては、ポーズの際に行なわれる他の要素、すなわち視線や身体の動きなども一緒に調べることが必要であろうし、また会話の最初から最後までの中でポーズの現れる頻度に差があるのかどうか、心理的距離がポーズに影響をおよぼすのかどうか、またポーズに性差があるのかどうかなども興味深いテーマだと思われる。

参考文献

- 近藤富英 2005 「非言語行動である「うなずき」の機能とその役割への一考察」、『信州大学人文学部人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』, 第39号。
塩沢孝子 1979 「日本語の Hesitation に関する一考察」, 『ことばの諸相』, 文化評論出版。